

この本と出会った

カタロニア讃歌 ジョージ・オウエル著

(現代思潮新社・2700円+税)



スペイン内戦。いまだ熱く語り継がれている「未完の現代史」。昨年は、スペイン内戦勃発80周年だった。記念する多様な催しが、同国、ドイツ、カナダ、アメリカ、ペルー、そして東京でも開かれた。これらはどう内戦を見るか、記録するか、そして伝えるかといったテーマであった。なぜなら、あの激動の1930年代、独裁と全体主義に向かって、恐るべき速度で方向転換を始めたヨーロッパにおいてスペインは、代議政体と多元的社会を守る最後の砦と映ったからだった。

36年、わが国では、真っ白く雪化粧をした東京を血染めにした二・二六事件が起こった。同年7月17日、北アフリカのスペイン正規軍の軍事蜂起、翌18日のスペイン

スペインに導かれた一作

本土の50カ所の軍事蜂起が勃発した。19日までに政府の首班は3人も交代した。ところが、軍部から「羊のごとく従順な」と蔑視されていた市井の民衆がマドリッド、バルセロナ、バレンシアなどで、叛乱軍を粉砕したのだった。彼らはその軍に屈服するより内戦を選んだのだった。これこそ、スペイン内戦の「原風景」であった。私は、この『カタロニア讃歌』によって後の研究に導かれたといっている。

同年12月26日、ジョージ・オウ

法政大学名誉教授 川成洋

〈かわなり・よう〉専門は現代英文学。英国の文学者とスペイン内戦の関係について研究している。法政大学名誉教授。社会学博士。



初版時、文壇にも一般読者にもほとんど無視された。当時の進歩的な知識人はスターリニズムの不誤謬(ごびゅう)性の喧伝者か、あるいは現実の政治権力の忠実な代弁者かであった。オウエルは「ソ連神話の正体を暴く」ために『動物農場』(1945年)、さらに全体主義のおぞましい人間性破壊を描写した『1984年』(1949年)を上梓した。

エルはILP(独立労働党)の機関紙特派員として「記事を書くつもりで」スペインに入国する。ところがバルセロナで、その革命的雰囲気は圧倒されて、ILPと連帯しているPOUM(マルクス主義統一労働者党・反スターリン系)の民兵隊に入隊し、バルセロナの北西部のアラゴン地方で、共和国軍の戦列で戦った。

「内戦の中の内戦」が勃発する。彼も否応なくPOUM側に与する。わずか5日間で、双方合わせて死者500人、負傷者1500人を出したという。その後、彼は前線に復帰するが首に貫通銃創を受け、戦傷のために除隊申請しようとした。バルセロナの定宿に戻る。たまたまILPの用事でバルセロナに来ていた妻のアイリーンがホテルのロビーで突然彼の首に腕を回し、「今すぐここから出ていくのよ」と耳元でささやく。既に共産党指揮下の秘密警察によるPOUMやその同調者であるアナキスト狩り、いわゆるソ連式の「赤色テロ」が市内を席卷していたのだった。結局、彼はひとりバルセロナ市内を逃げ回り、6月23日、アイリーンと2人のILP党员と一緒に、やっと国境を越える。

オウエルは、こうした辛酸をなめたスペイン内戦を「讃歌」という言葉に仮託して『カタロニア讃歌』(38年)として上梓するが、本書の末部で「不思議なことに、スペインでの体験は人間らしさに対する僕の信念を増やしこそすれ、減らしはしなかった」と述べている。

テロリストの処方

久坂部羊著(集英社・1500円+税)

に情報に振り回され、医療に期待しすぎる患者を揶揄する。まなごしも忘れない。